

# 乳がん 高度検診・治療センター NEW ーす NO.30

2016.11

## 乳頭から血液の混じった分泌液はありませんか

乳頭からの分泌液を訴え乳腺外科を受診する患者さんは少なくありません。そのほとんどが良性ですが、なかにごく初期のがんがありますので注意が必要です。今回は異常乳頭分泌について説明します。

### 異常乳頭分泌とは



妊娠・授乳期以外に乳頭からの分泌液がある場合を異常乳頭分泌と呼びます。異常乳頭分泌であっても、視触診や画像検査（マンモグラフィや超音波検査）でしこりを伴っていれば通常の乳がん診断に準じた検査が進められます。

一方、血性（血液の混じった液）の分泌液が主症状で、しこりが明らかでないか極めて微小な病変のみであれば特殊な対応が必要です。外観が黄色や透明に近くても潜血反応が陽性なら血性分泌液として精密検査の対象となります。潜血反応を含めて非血性（血液の混入がない）で、特に両側かつ多数の乳管から出ているような分泌液は心配ありません。以下、片方の乳頭の1か所から血性の分泌液が出る異常乳頭分泌に話を絞ります。

### 異常乳頭分泌の原因と検査方法



血性の異常分泌であっても、乳管内乳頭腫と呼ばれる良性腫瘍が頻度としては多いのですが、ごく初期の乳がん（非浸潤がんあるいは微小浸潤がん）のことがあります。

その鑑別には、通常の画像検査に加えて多くの場合MRI検査が必要です。かつては、分泌のある乳管から造影剤を注入してレントゲンを撮る乳管造影や、直接乳管内を観察する乳管内視鏡検査などが行われたこともありますが、診断精度に限界があり、今ではほとんど行われなくなりました。

一方、分泌液の検査としては、液の細胞診が重要です。ただ、がんであっても細胞診で確実に診断がつくとは限りません。がんの作り出す物質であるCEAの分泌液中濃度を調べる検査（ラナマンモカードCEA）も有力な手段です。

これらの諸検査で悪性と診断されればがんとして手術しますが、良悪性の鑑別が困難なことも多く、そのような紛らわしい病変には生検と呼ばれる検査のための小手術が必要です。生検の方法は、分泌液の出る乳管から色素を注入し染色された範囲の乳腺組織を切除するもので、通常は短期間の入院で全身麻酔下に行います。顕微鏡検査の結果がんと確認されても、病変が十分に切除されておれば再手術の必要はなく、乳房への放射線療法の追加のみで治療が終了することもあります。

また、総合的に良性と判断されれば基本的に経過観察のみでよいのですが、乳頭からの出血が精神的ストレスとなる患者さんには手術をお勧めします。

さらに詳しいことをお知りになりたいことがありましたら、乳がん高度検診・治療センターにお問い合わせください。



#### 異常乳頭分泌症（血性）でなされる検査

- 画像検査  
マンモグラフィ  
超音波検査（エコー検査）  
MRI
- 分泌液の検査  
細胞診  
分泌液中CEA測定
- 生検（必要に応じて）

市立貝塚病院  
TEL : 072-422-5865

KAZUKA